



ジョージア(グルジア)便り その67

Vol.85

今僕はどこにいるのだろうか？

文 高野 陽年

text by Yonen Takano



Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

地

地中海に沿うようにバルセロナからバレンシアへと道路が伸びている。もうすでに3時間はバスに揺られている。窓から見える透き通った青い空と金色に水面が光る海岸は僕らの感覚を狂わせる。今は何月だ。僕は今どこにいるのだろうか。

3週間の間中国全土を回ったツアーが終わったと思えばすぐに、僕らはスペインへ飛んだ。マドリッドから星を描くようにジグザグにスペイン各地を移動しながら舞台をこなし、今は地中海側のスペインを南下している。薄茶色のベースのバスケット地方から東側へ来ると、鮮やかなタイルが目立ち気分も少しは高揚する。

先月のキエフツアーから始まりエストニア、中国と周りスペインへ。この2カ月の間トビリシにいた日数は両手で収まってしまふ。スーツケース一つで毎日違う都市のホテル暮らした。先週はダウンのコートを羽織っていたが今は薄手の長袖で事が済んでしまふ。もうおしゃれをしていこうとかいう気力もなく、とにかく楽な格好でいようと、ジャージ姿で外に出ることも億劫

でなくなってしまう。

世界各国を飛び回って踊ると言えば聞こえはいいが、毎日移動とリハーサル、舞台そして食事場所の確保というルーティーンの繰り返しで、何か物事をゆっくり考える余裕もない。まるでダンサーロボットになったような気分だ。本来ならば毎日新しい環境に身を置けるわけだから、文化的刺激があるはずなのだが、それも頭で十分に把握できない。とりあえず携帯で写真を撮ってあとから見直すことにしよう。

ツアー先では舞台の環境もお世辞にも良いとは言えない。硬い床や狭い舞台、十分に練習もできず、自分のコーチも帯同しない。どうやってモチベーションを保ち、レヴェルを下げないで踊るかは自分自身との戦いになるわけだが、プログラムに名前が表記されず、名無しのダンサーとして主役を全うしなくてはいけないこともある。ここまですれば何のために踊っているのかわからなくなりそうであるが、観客にとってはかけがえのない機会には変わりない。もしかするとこの舞台をきっかけにバレエを目指すものが生まれるかも

しれない。そんな責任感と使命感だけをもって舞台に向かうしかない。

この2日間バレンシアで踊るとやつとトビリシに帰ることができる。温かく、日差しがまぶしい冬も捨てがたいが、今はトビリシの家で熱いお茶を飲んで、自分のベッドで毛布にくるまって寝ることが待ち遠しい。
ゴールはもうすぐだ。そう自分に言い聞かせて今日も鏡台の前でメイクをし、舞台へ向かうのであった。